*不通となっていたJR伯備線が運行を再開し、地震によるJR各線の影響はすべて解消。閉鎖となっていた米子空港も11日朝から運航予定で、これによりすべての公共交通機関が復旧する。*

*同日、多くの小中学校で授業が再開。校舎の一部が使えなくなった会見町会見小学校は11日から、被害が大きかった日野町内の小中学校は16日から授業を再開する予定。なお、県教育委員会のまとめによると、10日県西部地区の公立学校で、地震を理由に欠席した児童、生徒は192人。内訳は一時避難39人、自宅修理の手伝いなど38人、精神的な不安とみられるもの12人など。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計9班(18名:医師1、保健婦11、看護婦6)。避難所14カ所、独居高齢者・障害者等訪問84件。

【メンタルケア相談:米子保健所内、巡回班・市町村からの依頼、電話相談等に対応し、必要に応じて訪問】精神科医1(鳥取大学医学部付属病院精神科神経科より交替で参加)、保健婦1。相談1件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班(3名:医師1、保健婦2)

●精神保健福祉センターより、西部地区精神障害者作業所・グループホーム訪問2名(保健婦1、PSW1)。

前日同様、米子保健所を中心に、他の保健所等の保健婦ら、県立病院の医師、看護婦を中心に、チームを作って、情報交換、避難所や戸別訪問が行われています。交通機関も、午後からはほぼ回復してきているようです。会見町よりも協力要請があったとのことですが、会見町は1カ所の避難所のみで、精神科的に現在のところ、問題はあげられていません。精神障害者の自宅を保健所の方で訪問して欲しい旨の様です。

なお、本日、訪問活動には、当センターは参加せず、私は鳥取市の精神保健福祉センター内でセンター業務を、当センターの保健婦、PSWが本日より再開した精神障害者小規模作業所の状況確認に西部地区一帯を回って来ました。

●以下は、その状況報告です。

【淀江作業所(西伯郡淀江町淀江)】
指導員2名、メンバー6名に面接確認。
1)建物状況:玄関入口、台所、建物回りに亀裂20数カ所確認。
2)メンバーの状況:メンバーは全員無事。当日保健所デイケア参加や通院のため欠席していた者も無事。メンバー自宅では物の落下はあったものの大きな損壊はない様子。震災直後かなり慌てたと話す者もいたが、指導員は自分たちの方がかなり慌てておりメンバーはとても落ち着いていたとのこと。
【ひまわり作業所(米子市彦名町)】
訪問時、所長・指導員・ボランティア・メンバー12名に面接確認。
1)建物状況:作業場、休憩室、台所、トイレなど亀裂や隙間など10数カ所以上確認。余震の度にミシミシ軋む音が聞こえるとのこと。震災直後は断水をしたが翌日には回復。
2)メンバーの状況:震災当日、一旦は帰宅したものの、一人暮らしのメンバーから余震への不安の訴えがあり、結局一人暮らしのメンバー5名が作業所に集まって指導員とともに作業所内で一泊する。以後は落ち着きを取り戻している。メンバーの無事は全員確認済み。メンバーの自宅は物の落下などがあったものの損壊などはなかった様子。余震への不安もあって、不眠気味のメンバー数名は昼間の作業中に寝ている。(夜の入眠剤を昼間に飲んでいる)今後の余震の状況ではストレスがたまって不眠になるかもしれないと訴えるメンバーもいた。
【サンライズ作業所(米子市富益町　米子シンコー内】
訪問時、指導員1名、メンバー3名に面接確認
1)建物状況:作業所は米子シンコーの工場の一角を使用しているため、建物状況は不明。ただし工場は通常営業しているので、作業所には影響なかったものと思われる。
2)メンバーの状況:震災時、作業している後ろに立てかけていた衝立が倒れ、そばにあった扇風機が破損。メンバーは無事。メンバーの一人は震災当日ひまわり作業所に泊まりに行っているが、訪問時には全員黙々と作業しており大変落ち着いている様子がうかがえる。
【おしどり作業所・グループホームかがみ山荘(日野郡日野町)】
作業所指導員1名、グループホーム世話人1名に面接確認。

1)建物状況:作業所、グループホームともに米子土木事務所などによる建物の応急危険度の判定では緑表示(赤は立ち入り禁止、黄色は注意)であった。しかし作業所の外周りや地面の亀裂、屋根の破損やブロック塀にも亀裂、隙間が入っているのを確認。室内も床がダワダワしているところもある。作業所裏にある物置も亀裂が見られた。グループホームも玄関の開け閉めに支障が出ており、サッシも入らなくなっていたりしていた。室内も亀裂が入っていたり床がダワつき、ふすまが入らなくなっている箇所もあった。ホーム開所時の改修によってベニヤ板で覆われている柱などにも影響が出ているようである。

2)メンバーの状況

震災直後、作業所は一時パニック状態となったとのこと。作業所メンバーの多くは避難所に一泊した後、家に帰っている。全員の無事は確認されている。グループホームのメンバーの一人は、持ち家が被害の大きかった地区にあり、町の避難所に避難している。他のメンバーは実家に戻って生活している。作業所、グループホームは震災後から休みになっており、家での生活状況については不明だが、米子保健所根雨支所によると保健所保健婦の訪問や電話で確認したところ落ち着いているとのこと。作業所の再開は16日(月)を予定しているとのこと。グループホームについては、現在の応急危険度の判定では緑表示であるものの建築士等による安全確認の後再開の予定。

【県立精神保健福祉センター精神福祉主事　元木順子】

10月6日、西部地震が起こった時、私は根雨支所での事業が終わって、鳥取へ帰る途中で、まさに震源に近い溝口町内の国道を走っていた。一瞬ハンドルが取られ、突風が吹いたものと思ったのだが、道路標識や信号が揺れ続け、いつもなら保健所から帰る時に使う道筋にある川向こうの山肌で岩と木が土煙をあげながらゆっくりと落ちていくのが目に入った。あの時あの道を通っていたらと思いぞっとしたのを覚えている。地震だと気づいたのは、帰りの道すがら家の前で不安げに壊れた屋根を見上げる人たちの姿や道に散乱する瓦を見たときであった。慌てていたのだと思う。この時頭の中は鳥

取に帰ることだけ考えており、作業所や保健所を覗けばよかったと、後でとても後悔し自責感にもとらわれた。この日を振り返ると、自分自身ハイテンションで、鳥取に帰ってからも何かをやらないといけない気がしている自分と自分のテンションの高さに気づいている自分、というわけのわからない感情に包まれていたことを思い出す。

7日には、巡回健康相談にに参加。そして震災から5日目の10日は、精神障害者小規模作業所を巡回した。淀江作業所、ひまわり作業所、サンライズ作業所はすでに開所しており、メンバーもほとんど調子を崩すことなく元気に作業をしていた。ひまわり作業所では地震当日不安がるメンバー数人と指導員が作業所に泊まったり、ミーティングを行って互いに励まし合ったと聞き、指導員の配慮に頭の下がる思いがした。震源に近いおしどり作業所は家屋に亀裂が入ったり室内の家具や機器が倒れたりと一番被害が大きく、指導員らのショックも強い様子で再開の目途がなかなか立たない状況にあった。しかし避難所や自宅で生活しているメンバーから早期の再開を望む声に後押しされて巡回から数日で再開された。作業所は平素から障害者の社会復帰訓練の場や指導員とメンバー、メンバー同士の交流の場である。震災が起こり、あらためて作業所とメンバーの結びつきの深さやメンバーにとっての作業所活動の大切さを感じることとなった。またメンバーの安否確認などが作業所指導員によって行われ、障害者の地域ケアに果たす作業所活動の役割の幅広さや意義を再確認できた。

【6】10月11日（震災6日目）

*米子空港が運航を再開、ライフライン関係では断水はほぼ解消したが、会見町などで水道の濁りが取れず、1,265人が給水に頼っている。*

*鳥取地方気象台によると、同日午後6時までの体に感じる余震は、震度3を最大に18回で、前日に比べて10回以上減っている。一方、調査が進むにつれて被害も増え、負*

*傷者が2人増え97人となったほか、全壊家屋も19戸増えて99戸となった。*

*午後4時現在、県内では米子市279人、日野町76人、境港市44人など7市町村で496人が避難所生活を送っている。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計7班(14名:保健婦9、看護婦5)。避難所7カ所、独居高齢者・障害者等訪問45件。

【メンタルケア相談:米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談1件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班(2名:医師1、保健婦1)

●精神保健福祉センターより、巡回参加1名(保健婦)。

ほぼ、交通機関は回復。ようやく、米子空港で飛行機が飛び、あと一部は、地震のひどかった日野町(下榎や根雨など)を中心とした道路ぐらいですが、ここも充分に迂回できるようです。仮設住宅が作られることになったとの報道ですが、とりあえず、4戸+8戸、何となく神戸との規模の違いが分かっていただけるかと思います。

本日も、引き続き、米子保健所の保健婦を中心に(これだけ一生懸命やっていても、報道関係は、あまり地道な活動には興味がない?まぁ、来てもらっても邪魔だけれども)、巡回相談がいくつかのチームにて、主に戸別訪問を中心に行ってくれています。会見町の方にも昨日から参加しています。

また、大学病院精神科の方からも定期的に毎日夕方5時まで保健所に精神科医が常駐してくれています。これに加えて、本日、精神科医は、市内の避難所の訪問面接、そして、はるばる依頼を受けて震災後調子が良くないと言う高齢者の面接に淀江町まで保健婦と出かけていっていただいたそうです。

私は、本日も、精神保健福祉センターで、お留守番。当センターの保健婦が、米子保健所の巡回相談に参加してくれています。午前9時15分に民放ラジオ(BSS)で5分ほどインタビュー(定期的に月1回引き受けている仕事)、午前9時45分にNHKラジオで同じく5分ほどインタビューを受けましたが、昨日からボチボチと学校が始

まったこともあり、話題の中心は子どもです。ちょっと、ちょっと、被災者は子どもばかりじゃないのよと言いたいところもありますが。

ふと、思わず、新しい相談を思いつきました。毎日、保健所には精神科医が常駐して、精神保健相談には乗ってくれていますが、これに加えて、子どもを対象とした相談を次の通り作りました。原則的には、米子保健所予防係に事前予約して下さい。

※【震災後の子どもの心のストレス相談】

（この名前は、私が神戸で参加していた、震災後の心のストレス相談センターをまねて作りました）

日時：10月13日（金）午前9時から正午、14日（土）午前11時から午後4時、21日（土）午前11時から午後4時。場所：米子保健所

私と精神保健福祉センターのスタッフが対応する予定です。この様子を見て、今後の対応を考える予定です。

などと考えて自宅に戻ると、携帯にNHK中国地区担当から電話。13日（金）夕方、NHK中国で震災の特集をするので、出演して欲しい、一番ひどかった日野地区の避難所から中継でとか。「ちょっと、私は、その時間、鳥取で面接しているから、鳥取ならまあ良いけれど」と言うと、わずか1分で出演は没になりました。だいたい、私はその避難所には2度しか行ったことないし、そんなに大きな顔してそんなところで喋れる分けないでしょ。（余談の笑い話？；震災の翌日、町の職員がこの避難所でおにぎりを配っていると、数メートル向こうでまだおにぎりをもらっていない人に、某報道機関がマイクを突きつけて、ご飯はまだ配られないんですね。大変ですね。なんて尋問していたらしいです。ちょっと、あと20秒で配れるから、横で配ってるでしょ。なんて言ってると、あとで報道機関の人が、おにぎり3個下さいと言って来たそうです。私ならローソンで買えと言いたいところですが、保健婦さんは優しくおにぎりをあげたそうです。ご立派！）

【7】10月12日（震災7日目）

*県は、県西部地震による被災者生活再建支援法の適用対象を、県内全域の全壊世帯に広げることを決めた。同日午前の集計で、県内の全壊家屋が104世帯と、適用基準の100世帯を超えたため。同県はこれまで、米子市*

*など2市1町を適用地域に指定していた。全壊世帯には、最高100万円の自立支援金が支給される。*

*江府町内の4つの小学校と江府中学校では授業が再開。このうち壁にひびが入るなどの被害を受け、校舎が使えなくなった明倫小学校は、同町江尾の同町山村開発センターに場所を移して授業を始めた。*

*日野町では、応急仮設住宅の建設がスタート。日野町黒坂の黒坂小学校グラウンドでは、約500平方メートルの敷地で2DKの仮設住宅12戸を着工。県は同町内でさらに12戸の建築を予定している。*

*なお、鳥取県や島根県内で、ホテルや旅館などの予約キャンセルが相次いでいる。全壊した境港市の大社教上道教会の写真や記事が、テレビや新聞でたびたび取り上げられ、地震被害を受けていない出雲大社(島根県大社町)が倒壊したと勘違いされているとも。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計7班(14名:保健婦10、看護婦4)。避難所2カ所、避難施設巡回、独居高齢者・障害者等家庭訪問等35件。町の中には、避難所の移動があるところもあり落ち着かないと。町村職員の疲労も目立つ。独居高齢者からは、「家庭訪問で声をかけてもらい感謝している」との声も。

【メンタルケア相談:米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談6件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班(2名:保健婦2)

●精神保健福祉センターは、「災害時の心の対応マニュアル」(約40ページ)を作成、西部関係機関約300部カ所に郵送。

早々に、東京都中部精神保健福祉センターから、『災害における心の健康への対策マニュアル』が送られてきました。ありがとうございます。感謝、感謝。実は、この前には、広島市精神保健福祉センターからも、『災害における心の健康のマニュアル』を送っていただきました。感謝、感謝。そうそう、これを使わない手はないと、一応了解を頂いた(つもり)で、一部(まあまあ量がある)をコピーして、300部

ほどセンターのスタッフが、仕事をしながらも総動員でパンフレットを作成して、西部地区の学校関係、保育所関係、市町村関係等に同日郵送しました。きっと、一両日中にはつくことでしょう。スタッフの皆様、私の朝のふっとした思いつきに、おつきあいいただきまして、夜遅くまでの発送ご苦労様でした。

ところで、今朝、NHK鳥取版を朝見ていると、昨日（思いつきで作った）相談事業が、紹介されているのですが、時間も言わなければ、内容もテロップに流れない。単に「ストレス相談」を「米子保健所」で受けていますという情報でした。もう少し情報をキチッと流して欲しいと県に再度お願いしたところ、夕方、NHKの方から逆に電話を頂きまして、結局直接情報を流しました。

ところが、これに効を奏したのか、この番組を見ていた一人暮らしの中年女性がすぐに来て欲しいとのSOSを、米子保健所に電話してきてくれました。当時は、常駐精神科医は、依頼を受けて江府町の方に出張面接。とりあえず、そのあとに訪問することになり、それまでは保健婦が連携を取ると言うことになったようです。

それから、県内、県外といくつかの機関の方から、何か協力できることがあったら手伝うよと電話を頂きました。本当にありがとうございます。とりあえず今は何とかやっていますが、状況はまだ分かりません。その時は、是非協力をお願いするかも知れませんので、よろしくお願いします。

【8】10月13日（震災8日目）

*県西部の人気観光施設「夢みなと公園」（境港市）と「とっとり花回廊」（会見町）が8日ぶりに再開した。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計7班（14名：保健婦10、看護婦4）。避難所2カ所、避難施設巡回、独居高齢者・障害者等家庭訪問等96件。町からは、不眠、食思不振、血圧不安定者に対するフォローへの要望も。

【メンタルケア相談：米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談5件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班（2名：医師1、保健婦1）

●精神保健福祉センターは、米子保健所内にて、【震災後の子どもの心のストレス相談】を実施、これに先立ち西伯郡内小学校・保育所等を訪問(2名:精神科医1、心理判定員1)。

震災が起きて一週間目という言うことで、いろいろな特集が組まれています。今日は、報道機関の人とは全然会わなくて、皆日野町に行っているんでしょうね。4日ぶりに米子に入りました。今日から4日間は、米子と鳥取(この間、90km、車で約2時間)行ったり来たりです。予定では、(思いつきで作った)震災後の子どもの心のストレス相談をする予定でしたが、ほとんど宣伝もしていないのでとりあえずゼロ(恥ずかしながら、予定通り?、ちなみに、明日は、今のところ2件予約が入っているみたいです)。その後、米子保健所のスタッフと今後の対応について一緒に協議。

そうこうしているうちに、西伯町の保健婦さんから、保育所や小学校が始まったけれども、何となく様子がおかしいとの連絡、早々に、一緒に来た精神保健福祉センターの心理判定員と一緒に、西伯町まわりをすることに決定しました。

ちなみに、本日も、引き続き、米子保健所の保健婦を中心に巡回相談、戸別訪問、地道な活動ですが、やはりこれが基本です。岸本町の方へも、2日前から参加。そうこうしているうちに、保健所の別の保健婦が、依頼を受けたとかで、会見町の方に大学病院の精神科医と訪問に出かけていきました。会見町は、まだ、水が出なくて大変だそうです。特に、高齢者にとっては、運ぶのも大変、お風呂も大変です。

で、出発。行きがけに、米子児童相談所に顔を見せに行くと、ちょうど、児童相談所のスタッフも日野町方面で出かけるところでした。あとから聞いたところ、保育所に関しては、溝口町、江府町、日南町など、表面的には大きな問題はなく、日野町は来週から再開とのことです。すでに、保育士さんは、各家族を巡回しているようですが、皆元気そうだとのことですが、少し再開に向けて不安もあるようです。道を間違えながら、西伯町到着、保健婦さんと一緒に、保育所2カ所と西伯小学校を回りました。園児たちはおおむね元気、昨日は、遊具が点検で使えなかったりで園庭を充分に使えなかったためか、園児たちもちょっとストレスだったようですが、今日は元気そうです。

最初の頃は、余震があると泣く子や表情の硬かった子もいるようですが、徐々に良くなってきているようです。ほとんどの子は保育所で地震に合っており、保育所に行くことを怖がった子もいるようですが、ほとんど休む子もないとのこと、ただ、当日休みで自宅で地震にあった子は家に帰るのが怖くてしばらく避難所で生活したりする子もいたようです。

西伯町は、余震が多く、特に夕方から夜間にかけてよく揺れたため、余震への恐怖があるようです。そのためにも、余震があったときお母さんや家族がそばにいてくれれば安心感につながり、それがないと不安感につながります。けれども、お母さんがいなかったことを責めることもしないのも原則です。お母さんの中には、仕事があってやむなく帰れない人もいます（町の職員も、地震があっても、ほとんど子どもの顔を見て話す時間のない人もいます）。人より、時間がかかっても、多くは回復してきます。

ただ、余震があって怖がってお母さんにしがみつくのは、正常反応ですが、余震が減ってきているのに、予期不安が高まり、日常生活が混乱してくるようになれば、もう一度相談して、関わり方を考えるようにしていきましょう。

小学校は、特に大きな問題はないようですが、何となく休憩時間は、ハイテンションと言った印象もあるようです（こういった反応は、震災後に見られてもおかしくないようです）。また、震災と関係あるかどうかは分かりませんが、指を詰めたり、頭を打ったりするなどケガをする子どもが多く、もしかしたら過度の緊張に加え、集中力の低下などが慢性的にあるのかも知れません。中学校には行っていませんが、特に変わったという具体的な情報はありません。

それから、今回の震災は、小学生は皆学校で地震にあったと思っていたのですが、西伯町では、介護保険推進全国サミットが開催されており、初日のパネルディスカッションの途中に地震発生しサミットは中止。サミットの準備だけでも町職員は徹夜気味だったのが、震災でそのまま、再度徹夜に突入したそうです。また、子どもたちは、午前中で自宅に帰され、多くの子は自宅で（祖父母と一緒の家が多いらしい）地震にあったようです。また、余震の強いのが夜間に起こっているので、風呂にはいるのが怖くて入れない、車で寝るという話しもあり、新聞は新聞で、もう一度強いのが起きると書いていたので

不安が高待っています。一部には、大山は休火山なので、また爆発すると言う噂もあるようです（ここまで来れば、真偽不明）。そう言えば、鳥取砂丘が液状化現象を起こしていると言う噂もあると報道されていました。

帰り道に、1件、園児宅を訪問してきました。その後、帰りがけに、西伯町の健康管理センターで、カレーライスやみそ汁、サラダをごちそうになって帰りました。栄養士さんが、不眠不休で仕事をしている町職員は、食事も不規則なら栄養のバランスも悪いと言うことで考えられたそうです。それぞれの立場で、それぞれが活動しているんですね。

ちなみに、私は、今回の震災で思ったのですが、余り躁状態の人がいないと感じていたのですが、まんざらそうでもないようです。軽い躁状態の人がいて、また皆気を張っているために、些細なことがきっかけでトラブルが起きるようになります。これから、ちょっとこのあたりが心配です。また、避難所生活が長期化し、一部の家族だけが家に帰ることができず、取り残され感が出てきます。「何とかなる」という感情が、「何ともならないのでは」と言う無情感や怒りがそろそろ出てくる時期です。表面的には、落ち着いてきていますが、ちょっと気を引き締めておく必要があるかも知れません。

別情報ですが、一番被害の強かった黒坂にあるグループホーム（家族会と町と保健所が、頑張って作ったところです）、当初は大丈夫だという「緑紙」だったのが、改めて建築士に見ていただいたところ、一転、立入禁止の「赤紙」に変わりました。このため、グループホームに入っていた人は、引き続き避難所生活を余儀なくされることになりました。修理費推定、60万、60万、60万、60万、何度読んでも、60万円です。

なお、16日、17日、群馬県で開催される全国精神保健福祉センター研究協議会で、私と保健婦が2題演題発表の予定にしていましたが、状況的に急遽、中止する事にしました。全国の精神保健福祉センターさん、ご迷惑をおかけしてすいません。ちなみに、保健婦が発表しようと思っていたのは、この「赤紙」のグループホームを中心とした精神障害者の地域保健活動です。予定では、その場で聴衆からカンパを集めてやろうともこっそり考えていたのですが。

【県立精神保健福祉センター心理判定員　木下直子】

所長と私が西伯町を訪問したのは10月13日でした。とても天気のよい日だったことをなぜかよく覚えています。西伯町に近づいて私の目に次々と飛び込んできたものは、屋根にかぶせられた青いシートでした。家々の青いシートを見た時、急に緊張感が高まりました。

まず、西伯町健康管理センターで西伯町の保健婦さんと出会って状況の説明を受け、訪問先の確認をしました。保健婦さんの顔には疲労の色がうかがえましたが、その身振りから力強い使命感があふれていました。

そして、ある家を訪問しました。地震後不安定な行動が続いて登園できないという子どもの家でした。出迎えていただいたのはその子のおばあさんでした。聞くとその子へのケアは地震後すぐに始まっており、訪問した時点では保育園にも出られるようになっていました。経過を聞きながら対応の早さに驚きました。

町内2個所の保育所と小学校1校を訪問しました。その時保育士さんから聞いて今も心に残っている子どものことがあります。その子の両親は共に役場関係の職員で、地震直後からその時々の対応のため、家にも帰れない状況だったそうです。1才頃のその子どもさんの日常生活は大きく変わり、両親にゆっくりとかかわってもらうことなどはまったくできない状況でした。当然、昼間は保育士さんが安心できるように考えて養育にあたられておられましたが、家庭ではきわめて不安定な状態が続いていくと思われました。

災害時には、直接被災された方への救援がなされるわけですが、その一方救援にあたらなければならない人々のサポートも必要であり、多くの人の輪、連携が大事なのだと痛感しました。

【9】10月14日（震災9日目）

*会見町では、震災後町内8カ所でパイプが破れ一時断水状態、その日夜までには復旧。しかし、町内の約3分の*

*2以上の水量を確保している滝山水源(湧水)から泥水が出ていることが分かり、町内の約6割が水洗式トイレであることから、飲料水としては使えないことを広報した上で、給水を続けた。その後、町では急きょ、仮設のバイパス工事を実施。配水池にたまった泥などを抜き取り、14日ほぼ全域で完全復旧した。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計7班(14名:保健婦11、看護婦3)。避難所1カ所、避難施設巡回、独居高齢者・障害者等家庭訪問等64件。独居高齢者訪問で、体調不良にて救急車にて米子市内の病院受診した事例も。また、電気修繕の要望等もあり、町村役場との連絡もとりあう。他にも、「片づけが大変」「手が足りない」「家に水が入ってきた」「被災証明書の発行について」等健康相談以外の部分の訴えも多く、随時役場との連携をとる。

【メンタルケア相談:米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談2件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班(2名:医師1, 保健婦1)

●精神保健福祉センターは、巡回参加1名(保健婦)。

【震災後の子どもの心のストレス相談:米子保健所内】2名:精神科医1、保健婦1。相談2件。

●「震災後のこころのケア学習会」(於:西伯町健康管理センター、午後5時〜)

米子保健所を中心とした健康相談は、今日も引き続き8時30分に集合して、各地域に出かけています。本日は、保健所(他の県内保健所・県立病院等職員を含む)より7班(14人)が巡回、各地域で町村と打ち合わせの上、実施します。精神保健福祉センター保健婦も一人、巡回スタッフとして参加。また、保健所内にも、精神科医が大学病院から常駐し担当保健婦と一緒に、電話相談や、必要に応じ訪問面接を実施しています。私の方は、精神保健福祉センターのもう一人の保健婦と一緒に、本日は、米子保健所内で「震災後の子どもの心のストレス相談」と言うことにして、相談を受け付けています。

本日は2名とも幼児とそのお母さんです。一人は、自宅で被災してから、余震があるたびに母にしがみつくだけでなく、車や飛行機

の振動があっても同様の反応が起きると言う訴え。もう一人は、保育所で被災してから、登園拒否傾向にあるというものです。いずれも、正常範囲内のもので、まぁ、焦らずに様子を見ましょうと言った感じです。特別な援助が必要なのは、余震もないのに必要以上に興奮したり、恐怖を感じたり、あるいは、予期的な不安から過度のパニックを抱く場合ですが、そこまでと言う感じはありません。また、正直言って、親も、夜間あまり眠れていないので、せめて保育所にでも行ってくれないと、休む間もないと言うのも本音でしょうね。家族に、必要以上に、あれこれと子どものためだからと言って求めすぎると、かえって家族は悪循環にはまっていきそうです。

保健所の電話相談の中には、震災後、自宅の中が散乱し、一方で、船に酔った感じが続いており調子が悪いといったものもあり、同じように「船に酔った感じ」と言われる方は他にもあり、こういった自律神経症状がなかなかとれずに悩んでいる人も少なくないかも知れません。少量の抗不安薬で、ある程度落ち着いてくるとは思いますが、外見的に問題ない、一見被害の少ない地域の人は、特に訪問もなく、一人悩んでいるままの人がいるかも知れません。できれば、こういった人は、保健所の健康相談に電話でも帰るなどの手段でないと、こちら側も把握しにくいですね。

夕方、17時からは西伯町の健康管理センターで、子どもの心のケアを中心とした勉強会を開催しました。これは、昨日、保育士さんたちがまだまだ不安が強いとのことで、勉強会をしようと言うことで急遽決定したものです。幸いマスコミは来ず（知らず）、とにかく、西伯町は、マスコミにちょっとくたびれてしまったという感じで、非常に敏感ですね。

当日は、町内保育所保育士さん多数に、小学校養護教諭、中学校養護教諭、町保健婦と言った地元スタッフに加え、米子保健所保健婦、根雨支所保健婦、米子児童相談所職員、皆生小児療育センター医師、西伯病院医師、大学病院精神科医、臨床心理士会と言った面々にも参加していただきました。

最初に各自自己紹介の後、私の方から、今回の震災の感想や、震災における心理過程などを話させていただきまして、状況報告と言ったところです。保育園児の中には、足ががくがくして歩きにくいと訴える子どもも4、5人いるそうです。小学生は、今回の震災では、

自宅で被災した子どももいれば、登校班で下校中（上級生が、下級生を田圃の中に誘導してくれたそうです）、バスの中（パンクしたと思ったらしい）と様々なようです。なかなか、自宅に入るのが怖くて、自分だけ避難所で生活すると訴える子どももいるようです。また、昼間保健室で熟睡する子もおり、夜になかなか熟睡できないのかも知れません。今回、西伯町では、余震に対する恐怖感がとても強く現れています。また、小学校は、全体的に、一見大人しいような、ハイテンションのような雰囲気と言うことで、まだ緊張しているのかも知れません。ただ、10日の初登校は、校門でマスコミが待ちかまえていて、いきなりマイクは向けるわ、教室になだれ込むわで（ここでもやっている、西伯町職員の中にマスコミへの強い嫌悪感を表す人がたくさんいますが、まぁ、当たり前でしょうね）、そりゃ、ハイテンションになるわなぁの世界です。中学校では、今のところ、大きな変化は見られないようです。

避難所の避難者の中には、自分の体調への不安が強い人も多く、熱や血圧を測るだけでも安心されるようです。しかし、透析をしている人もいますが、決して食事はうまく行くとは限りません。西伯町の避難所の弁当は、各地域からの行為で、たくさん送られてきているようですが、どうしても栄養過多になるようです。町の人曰く、トラック野郎弁当とか言って、ご飯のおかずに、スパゲティに、焼きそば、特大ハンバーグとどうしても、栄養が偏ってくるようです。ある日は、朝から、特大イカのリングフライが5つ、確かに栄養はつくのでしょうが、高齢者の中には、便秘、嘔吐が多発しているようです。また、夜間子どもが興奮してバタバタして、高齢者から眠れないなどのトラブルがあったり、小児の喘息やアトピーの悪化（環境、食生活、毛布など）も多くなってきているようです。

でも、皆、疲れており、意味もなく「大丈夫ですぅ」という人もたくさんいて、「大丈夫だよという、その君の言葉が全然大丈夫じゃない」と言う状態です。

まだまだ余震があり、車で寝ている人もいます。テントを高く売りつける業者も登場してきているようです。それから、ブルーシートの配布は遅く、かつ数も少なく、幸いに雨がすぐに降らなかったから良かったものの、これからの課題です。でも皆、ブルーシートを張るには、ボランティアの人が各地で大活躍されたようです。ちなみに、ブ

ルーシートきれいですね。神戸の震災のブルーシートはもっと汚れていたような気がします。ほこりだらけだったからでしょうね。

2時間あまりの勉強会でしたが、まだまだ、小さな子供を預かる保育士さんの不安は高く、余震時の対応から健康管理まで、困ったことがあれば、町の保健婦や保健所の保健婦を通して動きましょうと言うことにさせていただきました。結構、皆、協力してくれると思います。

【10】10月15日（震災10日目）

*谷洋一農林水産大臣が、中浦水門や、境港の漁港施設、液状化現象が表れた中海干拓・彦名工区などを視察、「各市町村は大変な苦労をされていると思う。特に境港の水産業は規模が大きく、新しい融資制度をつくらないといけない」と。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、岸本町へ計7班（14名：保健婦11、看護婦3）。避難所1カ所、避難施設巡回、独居高齢者・障害者等家庭訪問70件等。高齢者の疲労や風邪症状の発生に対しての予防対策の指導（避難所内で風邪症状の見られる者数人）。また、独居高齢者や高血圧症者からは、通院困難な状況にあり血圧測定等が喜ばれている。

【メンタルケア相談：米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談4件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班（2名：医師1，保健婦1）

●精神保健福祉センターは、巡回参加1名（保健婦）。

米子保健所を中心とした健康相談は、今日も引き続き8時30分に集合し、避難所は大分少なくなり、ここ数日は、独居高齢者や障害者などへの戸別訪問が中心です。独居の人にとって、健康相談や訪問は、強い安心感に結びついてくるようです。精神保健福祉センター保健婦も一人、巡回スタッフとして参加。私の方は、午前中は、米子市内で、他の用事でした。午前中、大学病院の常駐精神科医は、保健所保健婦と、震災後関わっている米子市内の避難所

に訪問に出かけていきました。午後も、何やらと、出動されているようで。私の方は、午後にちらっと、米子保健所に行きますと、すでに訪問計画が作っていただいており、西伯町の避難所の方で、調子の悪い子がいるので見てきて欲しいとのこと。そそくさと、一人で西伯町の避難所（すでにプラザ西伯1カ所になっています）に出かけていきました。避難所に入るなりいきなり、「大変だったですね」とボランティアの人に越えかけられました。高齢者の人が多く、ちょっとした移動に手が掛かったりして、こういった避難所の中にボランティアの人がいると、いろいろと助かりますね。

小学生の子で、すでに、風邪薬をもらっているようですが、37度。ちょっと、避難所の方も涼しくなってきたみたいですね。

高齢者のいるところには、あたらに暖かめのフトンも配布されているようです。昨夜も夜中に、2回ほど震度3程度の余震があり、本人はよく覚えており、慢性的な睡眠不足、疲労と言った感じです。明日、西伯病院小児科受診予定とのことで、帰りがけに西伯町健康管理センターに立ち寄り、町の保健婦さんに状況説明、ついでにちゃっかりとポカリスェットを頂いてきました。また、夕方にのぞいてもらうようにお願いし、私の方も、小学校の養護の先生に明日朝すぐに連絡を入れさせておいていただきます。また、同センターの一室ではでは、巡回部隊の保健婦さんや町の職員産達が、住宅地図を持ち出して、今後の戸別訪問の計画を立てていました。ここのセンターは、先日最大級の余震があったときに天井の資材が落ちたところで、床には大きな傷が付いていました。部屋のど真ん中に落ちてきて、もしかして誰かが眠っていたら大けがをしていたところです。何でも、たまたま面白いテレビがあったとかで、テレビのあるロビーの方に集まっていたようです。テレビ番組のおかげ、いったい何の番組だったんでしょうか。日曜日の夜8時55分頃です。だったら、このテレビ番組に感謝ですね。

ちなみに、国道180号線も全面復旧。大まかに、迂回せずに、主要な部分には行けるようになりました。

精神科医常駐体制も、大学病院精神科医のローテーションに、新たに、国立療養所鳥取病院及び西部地区の精神科病院の精神科医の加わってもらうことになりました。ご苦労様！

明日は、米子市周辺部の市町村の職員を対象とした勉強会を米

子保健所で実施する予定です。なかなか、出かけてくる余裕のない町も多々ありますので、出かけさせていただいて、夜にでも、勉強会実施の日程調整中です。そろそろ、急性期を過ぎて、長期戦への体制を替えてくる時期です。疲れ知らずで、毎日せっせと夜遅くまで働いていている職員もいますが、なかなか、逆に命令でもしないと休めないし、休みにくいかも知れません。ローテーションで、キチッと、休みを作っていきたいところです。

【11】10月16日（震災11日目）

*最後まで休校していた日野町内の小中学校4校が授業を再開した。これにより、被災地で高校も含め、すべての学校で授業が始まった。*

*気象庁は、19日午後4時までの余震の発生確率を公表。M5.0以上の余震が起きる確率は5%未満で、大きな余震が発生する危険はほとんどなくなった。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、境港市へ計7班（14名：保健婦12、看護婦2、保健婦には倉吉市からも2名参加）。避難所1カ所、避難施設巡回、独居高齢者・障害者等家庭訪問78件等。

【メンタルケア相談：米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談4件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班（2名：医師1，保健婦1）

●精神保健福祉センターは、巡回健康相談とは別に、日野町保育所3カ所等を訪問（2名：精神科医1、PSW1）。

●「震災後のこころのケア学習会」（於：西部健康福祉センター、午後6時～）

●本日より、日野町立日野中学校へ臨床心理士の派遣。毎日午前10時～午後5時。

本日は、午前中を精神保健福祉センターで過ごし、午後から米子へ。米子保健所に立ち寄った後、精神保健福祉センターPSWと一緒に西伯町へ。

さほど、用事もなく西伯町健康管理センターへ。コーヒーを一杯

頂いて、介護保険推進全国サミット（第7回全国在宅ケアサミット IN 西伯）のパンフレットを一部頂きました。このサミット、西伯町が主催で10月6日、7日の両日に開催される予定だったのが、1日目のパネルディスカッションの最中に今回の地震が起きました。町中が総力を挙げた大イベントであっただけに、地震による中止は非常に残念であるばかりか、ここに至るまで、西伯町は不眠不休で開催準備に挑み、そしてその状態で地震に対応しているという状況です。その後、西伯小学校へ、昨日の女子のことで、連絡に養護教諭の先生に合わせていただきました。

その後、次なる目的地の日野町へ。西伯町と日野町は谷が一つ違うので、本来ならぐっと下（しも）に下るか、上（かみ）に登るかをしないと行けないのですが、そのまま、一気に山越えを試みました。しかし、途中で通行禁止、結局元の道を戻り、大幅に遅れて、日野町に到着、途中、「まだ着かないんですか」と町の保健婦さんから携帯に電話を頂きました。どうも、すいません。

午後4時、ようやく到着。その後、本日から始まった日野町の3つの保育所を順次訪問。1番目、「根雨保育所」。震災時は、お昼寝、何と防煙ガラスが床に落ちて割れたようですが、幸いにそこには誰もおらず、園児にケガはなし。そのまま園庭に移動、そのまま2～3時間、親の迎えなどを待っていたようです。園庭が少し小さい？特に、問題となる子は見られません。（すべての保育所では、開始前に、すでに保育士さんによって、家庭訪問が実施されています）引き続き、2番目、「日野保育所」、ここには被災の強かった下榎の人たちが通っています。震災時、お昼寝。水槽は20センチほど移動したようですが、棚からは落ちなくて無事だったようです。ピアノも40センチほど移動。園児にケガは無かったようです。園児はそのまま園庭に避難、テラスにひび割れがあり、早くになおしてもらったようです。園庭に地割れが合ったようですが、雨できれいに無くなったらしいです。

3番目、「黒坂保育所」、同じく昼寝の前後での地震、すぐに、園庭に避難。このあたりは、道路もいろいろと寸断され、なかなか、大人手が無くて不安だったらしいです。一人、自宅で震災にあった子もいます。ケガはなく、比較的、皆元気なようです。また、この地区では、地震を話題にする子どもたちが多いようです。これは、この地区

が、半壊状態の家が多く、建築士の判断が、「赤」や「黄」であると言った話題が、親の日常会話にあるために、あるいは家がまだ崩れている状態にあったりで、そのために不安な感じの子が他の保育所に比べて多いような気がします。

なお、これとは別に、他の地区で、自宅で震災に遭い、その後怖くて自宅に入れないと言う子がいるとの相談もあって、これは大学の精神科医が保健婦と訪問して対応してくれました。

こういった状況から、今回、江府町、西伯町、そして、日野町の保育所の園児の様子を見させていただいていくつかのまとめをすると、

1）地震時は、昼寝の時間であり、その事が不安が少なく、また当初より1カ所に集まっていたために、避難、誘導もやりやすかった。

2）けが人が、奇跡的に無かったことが、より園児の恐怖を少なくさせた。また、明るい時間帯、多くの友だちと一緒であったなど、こう言ったことから、地震そのものが余り強い外傷体験としては残っていない気がする。

3）避難時、園庭に比較的速やかに避難することができたが、そのまま、親が迎えに来るまで、2、3時間過ごしたところが多い。たまたま、天気が良く、温度も暑くもなく寒くもなくと言った状態であったことが幸いした。しかし、周囲からの即時的な充分な救援体制はなく、保育士としては大人の手が一人でも欲しいところであり、できれば、近隣の人に事前に呼びかけ、これる人は協力してもらうようなシステムが必要かも知れない。

4）一方で、自宅で被災した子どもは、家具が倒れる、両親がいないなどの不安、恐怖体験が残っており、自宅にいた子どもの方が恐怖体験が残っている。

5）今回の恐怖体験は、くり返される夜間の余震であり、この時、身近にお母さんなどがいると、お母さんにじっと抱きつくなどの行為によって恐怖を和らげている。余震時、お母さんであれ、父、祖父母など自分がスキンシップによって安心できる対象がいることが重要である。

6）不安が長引いている子どもの中には、家族がケガをした、家が片づかない、家が地震によって一部でも崩れかけていると言う、生活そのものがまだ不安定な場合があった。まず、家庭の環境が物理的に

安定することが、重要な課題となっている。
と言ったところでしょうか。
　そう言えば、ここ数日、ほとんどマスコミとは合わないですね。日野の町からも、マスコミはこの土日で撤退したのでしょうか。とても静かです。また、300人近くいたと言われるボランティアの方々も、日野地区では、ボランティアの弁当は今日までと言うことで、急に人数が減ってきています。まだ、被害のひどかった下榎地区では頑張っておられるようですが。また、日野地区開発センターにももうほとんど被災者の方はおられません。
(※後々の話の中でも、ボランティアの事が話題になりましたが、まだまだ、被災地の人の中には困っていることがあってもボランティアに頼っていくという意識が少なくて、ボランティアの側から積極的に入っていかないと難しいという問題がありました。一方で、かえって、地域と関係のないボランティアに手伝ってもらう方が、後々やりやすいと言う感じを持っている人もいるようです。)
　日野町の保健婦さんと簡単な話し合いを持って、急いで出発、缶コーヒーとミルクコーヒーをもらって帰りました。(すぐに、物をもらってしまいます)
　午後6時30分、米子保健所到着。本日は、近隣の市町村職員を対象とした震災後の心のケアの勉強会です。実は、6時開始で、講師かつ言い出しっぺの私が遅れて非常にすいません。私が来るまで、米子保健所より、これまでの活動報告をしていただいておりました。私の話を含め、およそ8時頃まで会を持ちました。
　さて、今後、どうなっていくのか、まだまだ分かりませんが、マスコミが言っているほど、強い子どもの問題は起こらないと思います(決してゼロではありませんが)。起きるとすれば、地震そのものの恐怖体験ではなく、地震後起きるさまざまな家族の問題、復旧の遅れなど2次的な要素が加わったものであり、これらは単にカウンセリング的なものではなく、ケースワーク的な対応が求められるのだと思います。また、急性期の対応から、これからは長期的な対応への切り替えも必要であり、そろそろ、市町村職員に対しては、休養を取らせると言うことを考えていく(今の状況では、上司が指示しないと休養が取りづらい)必要があると思います。

【県立精神保健福祉センター精神福祉主事　大森涼子】

地震が起こったとき、私は精神保健福祉センター内にいて、デイ・ケアのメンバーと午後の活動を一緒にしているところでした。揺れがおさまってから事務室に行き、鳥取は震度４、米子が震度６だと確認しました。出張中の職員も皆無事と知らされ安心しました。

夕方、原田所長との話し合いで、翌朝、米子へ原田所長も含め職員が出かけることになりました。私は土日を自宅で過ごし、自分の知る範囲での友人知人が元気なのだろうかと心配することしかできませんでしたが、保健婦さん方は震災直後から地道な訪問、相談活動をされていて、何もしていない自分に（大げさにいえば）罪悪感がありました。所長をはじめ当センター職員も米子へ出かけていく中、それでも、今の私が当センターの職員としてできることは、とりあえず、センター内での日常業務を続けていくことだろうと思い、通常のデイケア業務や相談業務、そして震災後の心のケアのパンフレット作りなどをおこないました。

震災後から、日々伝わる被災状況と続く余震に私自身も漠然とした不安がありましたが、実際に被災し、家が倒壊した人や避難している人はどんな気持ちでいるのかと胸が痛みました。

１６日、原田所長に同行し西伯町（西伯町健康管理センター、西伯小学校）と日野町（根雨保育所、日野保育所、黒坂保育所）へ行きました。西伯町では介護保険推進全国サミットが開催されたが開催途中で震災にあったことで、西伯町内関係職員の方々の疲れは計り知れないほどのものがあったのではないかと感じました。わたしにとっては「大変でしたね」と軽く声をかけることもできないような気持ちでした。西伯小学校では養護の先生から学校の様子を聞きましたが、さほど大きな問題もなくどちらかといえば、夜の余震におびえている子供が多いとのことでした。私には校内の子供たちも落ち着いた感じに思えました。日野町では３箇所の保育所へ行きましたが、共通していたのは、地震が起こったとき、お昼寝の時間だったということで、

子供たちが１カ所にいてしかも布団をかぶっていたということでした。本当にケガをした子供がいなくてよかったと思いました。預ける親の側も、預かる側もほっとしたことと思います。原田所長からは、自宅で被災した子供や、自宅で被災しケガをした親の様子に驚いた子供へのフォローが必要だと話がありました。

夕方は米子保健所にて震災後の心のケアの勉強会が開かれましたが、多くの方が集まり、米子保健所からのこれまでの活動報告や、原田所長から震災後の心のケアについての講演を聞きました。所長からは、地震そのものの恐怖体験ではなく、地震後起きるさまざまな家族の問題、復旧の遅れなど２次的な要素が加わったものから子供に問題が出てくるのではとの話がありました。今後について漠然と不安に思っている人に対してのケース・ワーク的な対応が求められるのだと感じました。また、これまでの急性期の対応から、これからは長期的な対応への切り替えも必要で、市町村職員に対しては、休養を取らせると言うことを考えていく必要があるとのことでした。勉強会が終わったあとの保健所で、仕事をしておられる保健婦さんに声をかけ話をしましたが、震災後からの地道な活動の様子に本当に頭が下がる思いでした。

【12】10月17日（震災12日目）

*県は、県西部地震で住宅が全半壊、一部損壊し、建て替えや補修が必要となった世帯を対象に、全国の自治体として初めて公的補助制度を導入し、建て替えの限度額は300万円とする方針で、県が3分の2、被災市町村が3分の1を負担すると公表（後に、一部内容変更あり）。*

*阪神淡路大震災後の平成11年4月から導入された被災者生活再建支援制度では、自然災害によって生活基盤に著しい被害を受けた世帯に対し、都道府県が拠出した基金を活用して最高100万円の支援金が支給されるが、用途は生活必需品や住居の移転費用に限られてお*

*り、住宅の再建への公的補助制度はこれまで例がない。※ちなみに、この制度は、人口流出をくい止めるという目的もあり、すでに震災数日目より片山知事はこの実施の検討に入っており、早い時期での発表となった。なお、全壊、半壊にこだわると認定が混乱すると言うことで、最終的には全壊・半壊にこだわらず、地震をきっかけとした家の建て直しには300万円、修理には150万円が補助されることになった。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、境港市へ計7班(14名:保健婦11、看護婦3、国府町、福部村からも保健婦が巡回に参加)。避難所14カ所、独居高齢者・障害者等訪問84件。

【メンタルケア相談:米子保健所内、巡回班・市町村からの依頼、電話相談等に対応し、必要に応じて訪問】精神科医1(鳥取大学医学部付属病院精神科神経科より交替で参加)、保健婦1。相談2件。

【夜間】西伯町内避難施設へ2班(3名:医師1、保健婦2)

●本日より、児童相談所を中心に、西伯小学校において、西伯郡内の児童相談を開始。心理判定員等2名が午前10時30分～午後3時30分まで対応。

鳥取県による、10月17日午後4時現在鳥取県西部地震被害状況によれば、●ライフライン／断水6戸、●住民避難／避難施設数:10施設、避難人員:78人。1週間前の10日午後9時現在の被害状況、●ライフライン／飲料水応急給水1,279戸、●住民避難／避難施設数:42施設、避難人員577人(うち避難勧告発令75人)に比較すると、かなりの部分で戻ってきています。しかし、本日午後4時現在、●住居被害／全壊123戸、半壊248戸となっており、むしろこちらの方は今後の大きな課題です。

巡回相談は、本日も同様に、米子保健所を中心として、市町村と連携して高齢者や障害者などを主に戸別訪問しています。また、今週から、学校現場の心のケアを主な目的として、西伯郡西伯小学校には、県児童相談所のチームが、 日野郡日野中学校には、県臨床心理士会が、いずれも交替で常駐のスタッフをおいています。

私の方は、午前中に、精神保健福祉センター内の業務、そしてい

くつかの町の保育所を見せていただいた経過から、保育所に通う子どもを持つ家族向けのパンフレットの文章を作成しました。

| |
|---|
| 鳥取県西部地震メンタルヘルス・リーフレット<br>＜発行＞　県立精神保健福祉センター<br>No. 2　保育所に通われるお子さんをお持ちのご家族の方へ<br>→　資料参照 |

さて、今後の課題ですが、私個人の印象としては、震災そのものの時の恐怖感がいつまでも残り、再燃したり、強い精神症状が再体験されると言ったようなPTSDたるものが、今回、そんなにたくさん問題とされるとは思っていません。マスコミや、県外の専門家の中にはこれを声高に言われる人も無くはないようなのですが。それよりも、今後、気をつけて見なくては行けないパターンを3つあげてみます。

(1)震災後、充分な休養を取っていない。過労状態にある。時に、本人もその自覚が少ない。被災者自身、あるいはその援助者(職員など)に見られる。充分な休息、休養を取るなどの、震災後の日常生活環境の見直し。

被災者の復旧のための熱心な活動や市町村職員の休みない仕事は、そろそろ休養の取り方も積極的に考える頃ですね。

(2)家屋の全壊・半壊、仕事上の問題(再開のめどが立たない)など、具体的な将来へ方向性がなく、著しい不安感がある人への、ケースワーク的対応。

県片山知事は17日、地震で住宅が壊れた被災者が住宅を建て直す場合、一律300万円の住宅復興補助金を交付するなどの施策を発表しましたが、被災者の住宅再建を目的とする現金給付は阪神大震災以降、自治体などから強い要望があるが実現しておらず、全国で初めてとか。こういった具体的な政策や制度上の保障など、個々のケースワーク的対応も求められるのかも知れません。

(3)個々の精神科的関わりを要する事例に対する介入。元来、精神疾患があって、その症状が再燃、悪化した人。神経症症状、不眠症状、自律神経症状が続いている人。家庭や学校・職場などで以前より何らかの葛藤を持っていていた人が今回の震災をきっかけに充分に適応できなくなってしまった人などでしょうか。個々の事例に応じ

た、精神科的治療などが必要となってきます。

【13】10月18日（震災13日目）

*JA鳥取西部は18日から、地震に耐え落下しなかった新興ナシを受験生用に「鳥取西部じしん梨」と名付けて販売。売値は「合格」「ご縁」にちなんで税込み5,555円。限定100ケース。すぐに完売。「あくまで自信が付くナシ。”自信なし”ではありません」とか。ちなみに、インターネットのみの販売であったが、翌日には完売、新たに100ケース追加したが、これも翌日に完売した。*

●米子保健所による健康相談等

【巡回健康相談】西伯町、日野町、溝口町、境港市へ計7班（14名：保健婦12、看護婦2、鳥取市から保健婦2名参加）。独居高齢者・障害者等家庭訪問97件等。被害を受けた住宅住民で、食事の代わりに飲酒しているという人も。「心細い」「話を聞いて欲しい」と訴える独居高齢者。家屋の損壊があるが役場まで行けないと言う高齢者も、役場と連絡対応。

【メンタルケア相談：米子保健所内及び同伴訪問】精神科医1、保健婦1。相談4件。

【夜間】西伯町内避難施設へ1班（1名：保健婦1）　※夜間は本日にて終わり。

本日で、地震による断水はすべて解消されたそうです。精神保健福祉センターの職員は、グループホームの修理について、その費用のことも含め考慮中。

私は、平日の大半は、鳥取市で精神保健福祉センターの日常業務を。鳥取市と米子市は東西90キロメートル離れていますが、鳥取市での仕事の話はほとんど地震とは関係ない「日常」であり、西部・米子市での仕事の話しは、、まだ「非日常」の話であり、頭の中で、この「日常」と「非日常」を切り替えていると言ったところです。

ところで、新たな課題が起きています。これまで、ほとんど巡回相談で目を向けていなかったいくつかの新興住宅地での問題です。巡回相談の対象は、高齢者であったり、障害者であったり、乳幼児・小児であったりするのですが、これらの対象でなく、かつ表面的には